同族目的語構文の相特性をめぐって

小野塚　裕　視

1．Macfarland の分析

同族目的語構文は，Massam (1990) や Tenny (1994) や Macfarland (1995) の分析によると，状況の型 (situation type) あるいは相 (aspect) に関する特性の観点からは，いわゆる達成 (accomplishment) あるいは完結的な (telic) 状況を表す。さらに，Massam や Macfarland は，同族目的語は，write a letter や build a house のようないわゆる創造動詞 (creation verb) がとる目的語と同じく，動詞の行為によって作り出されるものを表すとみなしている。したがって，同族目的語は結果の目的語 (effected/result object)，同族目的語をとる動詞は，創造動詞あるいは結果動詞 (effective verb) として機能していることになる。

同族目的語構文が完結的な状況を表すことは，例えば，進行形が完了形を含意するかどうかという診断法によって示される。

(1) a．Chris is living a righteous life.
　　b．Chris has lived a righteous life.
(2) a．Chris is singing a happy song.
　　b．Chris has sung a happy song.

MacFarland (1995：133) によると，同族目的語構文である (1a) と (2a) はそれぞれ (1b) と (2b) を含意することはないという。同族目的語構文が完結的な解釈をもつということに関しては，ほぼ意見が一致しているようである。

同族目的語構文は，完結的な解釈とは別に非完結的な (atelic) 解釈をもつともいわれている。この点に関しては，しかしながら，Massam と Tenny の

ように認める立場と，Macfarland のように認めない立場に分かれる。Massam (1990：178) には次のような例が見られる。

(3) a．？Casey laughed a hearty laugh in 20 seconds.
　　b．Casey laughed (a hearty laugh) for 20 seconds.
(4) a．Mayflies live their lives in a day.
　　b．Mayflies live (their lives) for a day.

(3b) と (4b) が示すように，同族目的語構文は，一般に非完結的な解釈の診断法として用いられる for を伴う時の副詞的表現と共起することが可能である。このように，同族目的語の存在は，必ずしも完結的な解釈をもたらすとは限らない。Massam はこのことに基づいて，同族目的語は，完結的な解釈を引き起こすことができる要素と考えている。Tenny (1994：39) も，(5) に示されるように，同族目的語が自動詞に付加されると，境界のない (non-delimited) 読みに加えて，境界のある (delimited)，すなわち完結的な読みが得られるようになると述べている。

(5) Mary laughed a mirthless laugh (in one minute/for one minute).

これに対して，Macfarland (1995：153ff.) は同族目的語構文は完結的な解釈だけを許すと考えているようである。その理由は，分析のもとになっている相の理論によるところが大きいように思われる。Macfarland は Olsen (1997) の相の理論に基づいて同族目的語構文を分析している。Olsen は語彙相 (lexical aspect) を [telic] と [dynamic] と [durative] という三つの意味素性の組み合わせとして特徴付けている。さらに，その特徴付けに際して，意味素性の値をプラスに限定し，プラスの値をもつ意味素性だけを表示するという方式をとっている。もう少し詳しい説明は 2 節で与えることにして，Macfarland の主張との関係で重要なのは，プラスの値は変わらないという仮定である。Macfarland は同族目的語構文は完結的な出来事を表すと結論づけた上で，Tenny が (5) のような例に言及して，同族目的語構文は完結的にも非完結的にも解釈可能であると述べている点を取り上げ，for を伴う時の副詞的表現と共起できるから非完結的である，あるいは境界をもたないと考えるのは誤りであると主張している。その一番の根拠は，先ほども述べたように，どうも理論的なも

のであるように思われる。Macfarland が利用している Olsen の分析では，達成は [+telic] [+dynamic] [+durative] という素性の組み合わせで表示される。ここでは特に [+telic] が重要である。MacFarland は，Olsen の理論ではひとたび [+telic] の標識が与えられれば，その指定がないような解釈はできないことになるので，[－telic] の解釈になるはずはないと考えて，Tenny の for を伴う時の副詞的表現による診断法の使い方に問題があると主張する。Macfarland はこの副詞的表現は均質的な（homogeneous）状況と共起すると考える。均質的な状況は状態（state）と活動（activity）の特性であるから，これは別に目新しい考えではない。Macfarland はさらに同族目的語構文においては，結果の目的語はそれをもたらす活動と同じ時間的広がりをもち，活動と同時であるような存在物を表すと述べている。例えば live a life であれば，生活をするという活動が存在すると，その生活が存在することになる。その生活は生活するという活動が存続する限り時の経過に伴って存在を続ける。このような特徴によって，同族目的語構文が表す状況は均質なものになり，それゆえに for を伴う時の副詞的表現と共起できるようになるというのである。[1] この説明は，しかしながら，同族目的語構文が創造的な達成，あるいは完結的な状況を表すという特徴付けと相容れないと思われる。例えば，laugh a (hearty) laugh であれば，笑うという行為によって，a laugh が生み出されるのであるから，a laugh が存在するようになるのは，笑うという行為が終わる時になるはずである。そうであれば，笑うという行為と同時に a laugh が存在するようになるということにはならない。存在するようになるのはひとまとまりの笑いの一部だけである。すなわち，達成の解釈であれば，その状況は均質ではないはずである。

ところで，上の Macfarland の説明は，同族目的語構文の活動（activity）の解釈に対してなら問題なく当てはまりそうであるという点に注意する必要がある。活動の場合は，ある行為が行われると同時にその行為が存在することになる。だからこそ，活動の進行形は完了形を含意するのである。同族目的語は，活動と同時に存在するようになる行為を表現する，動詞と同じあるいは類似の形をもつ名詞形にすぎないという趣旨の Halliday（1967：59）の考えにも注意すべきである。[2] Macfarland は同族目的語構文の進行形は完了形を含意しないと一貫して述べている。実際これを，同族目的語構文が完結的な状況，すなわち達成，を表すことの唯一の証拠とみなしている。しかしながら，上の均質性に関する Macfarland の説明では，同族目的語構文の進行形は完了形を含

意してもよさそうにさえ思わせる。

Macfarland の主張を要約すると，同族目的語構文は均質な完結的出来事を表すということになる。次の例を比較のために考えてみよう。

(6) John pushed the car to a gas station in an hour/*for an hour.

Push the car という表現は活動を表すのが普通である。それに着点を表す to a gas station が付加されると，これが境界要素（delimiter）の働きをするようになって，達成，すなわち完結的な出来事を表すようになる。この場合は，着点に到着するまでの活動は，均質であるといってよいであろう。にもかかわらず，for で始まる時の副詞的表現と共起しないのは，境界，あるいは結果の状態が加わることで，出来事全体としては均質ではなくなるからである。同族目的語構文は均質な状況を表しかつ完結的であるという Macfarland の主張においては，完結性を与える境界の存在あるいは作用が無視されていると思われる。[3]

ここで指摘したいくつかの問題点を考慮すると，Macfarland の主張は受け入れがたいと結論せざるをえないであろう。したがって，同族目的語構文の相の特性については，Massam や Tenny にならって，完結性に関して多義的であるという立場に立つことにする。

本論の残りの部分では，同族目的語構文の多義的な相特性を，Olsen の相の理論に基づいて，Macfarland とは異なる観点からとらえる試みをしてみたい。

2．Olsen の理論に基づく別の分析

Macfarland は前節で述べたように，Olsen のプラス指定された素性は不変であるという仮説にしたがって，同族目的語構文は[+telic]の指定をもつから，必ず完結的な解釈をもたなければならないと主張している。それ故に，for an hour のような副詞的表現と共起する場合を説明する必要に迫られたわけである。一歩譲って，Macfarland の説明が受け入れられる余地があると仮定しても，Olsen の理論では，もう少し違う扱い方の可能性も存在すると思われるので，その点をこの節で考えてみることにしたい。

前節でも触れたように，Olsen は語彙相（lexical aspect）を [dynamic] と [durative] と [telic] という三つの意味素性の組み合わせによって特徴づけよ

うとしている。Olsen の提案の大きな特色は，素性の表示をプラスの値をもつものだけに限るという点である。たとえば，run という動詞はふつうは活動を表すが，その相は[+dynamic]と[+durative]との組み合わせで表示される。活動は非完結的な状況であるから，[－telic] であるが，Olsen はマイナスの値をもつ意味素性は表示しないようにしている。その理由は，活動の telicity の特性が，文脈やほかの構成素の付加によって変化するからである。次の例によってそのことを示すことができる。

(7) a．Carl Lewis ran.
b．Carl Lewis ran a mile.
c．Carl Lewis ran to the store.

(7 a) の自動詞 ran はそのままでは活動を表し，普通の素性を使う表示法であれば，[－telic] の指定も含まれる。しかし，その素性が表す特徴は (7 b) や(7 c) のように，名詞句や前置詞句が付くことによって，うち消されてしまう。それに対して，プラスの値をもつ [+dynamic] と [+durative] という素性が表す特徴は不変でうち消されることはない。Olsen は活動が一般に [－telic] の解釈を受けるのは，会話の含意によると考える。すなわち，活動動詞を話し手が使用する場合は，[+telic] であると主張する (assert) 動詞を使っていないことになるので，聞き手は語用論的な推論を働かせて，[－telic] と解釈するというのである。非完結の特徴は会話の含意に基づくので，打ち消しが可能であると考える。Olsen はこのような観察を基にして，相を規定する意味を，不変の意味論的意味と，変化しうる語用論的意味とに分ける。前者は，プラスの値をもつ素性によって表示されるが，後者は，表示されないままにされる。表示されない意味素性は，先ほども触れたように，普通は語用論的な推論によってマイナスの値として解釈される。Olsen はこれを自動的に与えられる解釈 (default interpretation) とみなす。活動の完結性 (telicity) に関する表示されない意味素性は，文脈によって，[+telic] と推論されることがある。たとえば，Carl Lewis がいつも決まった距離を走るということが話し手と聞き手に了解済みであれば，(7 a) は [+telic] と同等に解釈される。また，(7 b)や(7 c) のようにある種の構成素が付加すると[+telic]という素性が付加されることになる。

Olsen はさらに，プラスの値をもつ素性は不変の意味特性を表すのであるか

ら，ほかの構成素の付加や文脈によって影響を受けない，すなわちプラスの値がマイナスの値に変化することはないと主張している。

Olsen（1997：16）は，動詞は語彙相に関して，内在的に指定されていると仮定している。そこで次の一組の例を考えてみよう。

(8) a．Mary ate an apple.
b．Mary ate apples.
c．Mary ate ice cream.

（8）のような場合の扱いに関しては，Olsenははっきりと述べていないが，'eatという他動詞は，その目的語の可算性の性質によって完結性に関わる相特性を変えるので，おそらく，eatという単独では生じることのない架空の自動詞の存在を想定して，その自動詞自体はtelicityの素性の表示は伴わないと考えるようにしないといけないであろう。というのは，（8a，b）に基づいて，[5] eatを［+telic］と指定してしまうと，［−telic］である（8c）の扱いに困ることになるからである。こうすれば，［+telic］から［−telic］へという望ましくない変化は生じない。

（7b，c）や（8a，b）では，付加される構成素が表示されていない意味素性をプラスの値をもつ素性に変える働きをしているが，（8c）のように，変化をもたらさない構成素も存在する。（8c）の場合は，不可算性による積極的な効果によるものであるが，もっと一般的には，Tenny（1994：13）も述べているように，直接目的語の名詞句は，出来事に境界を与える働きをもつもの，すなわち，完結性を与えるもの，とそうでないものとがある。後者の例には次のようなものがある。

(9) a．Dan pounded the wall.
b．Bill pushed the cart.

Hit the fenceやchew the cheeseなども同類である。

さらに，境界をもつ読みともたない読みの両方を許すものもある（Tenny（1994：32））。

(10) a．walk the trail in an hour/for an hour

b. climb the bridge in an hour/for an hour
c. play a sonata in an hour/for an hour

(10) のような場合は，Olsen の理論に基づくならば，動詞には完結性を表す素性の表示はないということになる。[+telic] の解釈になるか，あるいは [−telic] の解釈になるかは，目的語によって表される経路(path)を最後までたどったかあるいは途中までしかたどらなかったかの違いに依存して決まる。

最後に，Olsen の考え方を踏まえて，同族目的語の話に戻ることにする。同族目的語構文のもとになる動詞は，Macfarland も指摘しているように，大部分は活動を表す自動詞である。従って，Olsen の理論では，もとになる動詞の完結性を表す素性は表示されず，同族目的語構文は，潜在的に [+telic] と [−telic] の両方の解釈が可能ということになる。この観点から見直すと，Macfarland と Massam/Tenny の違いは，[−telic] な読みを認めるかどうかの違いだけである。Macfarland は，Olsen の考え方をある意味では誤解して，同族目的語構文の非完結的な読みを無理矢理排除しようとしている感があるが，説明法としては，潜在的には許されるはずの [−telic] の解釈が許されないのはなぜかを明らかにすべきであったと思われる。一方，同族目的語構文を多義的と考える場合には，[−telic] の解釈は，どのような要因の作用によって生じるのかを説明する課題が残る。[6]

注

1 原文は次の通りである。

> Now consider cognate object construcitons such as *live a life*. Here the result object is co-extensive (see also Halliday 1967 : 59, Macfarland 1994 b) and simultaneous with the activity that brings it into existence : as soon as living exists, the life exists, and it remains in existence over time as long as the acitivity of living continues. It is this co-extensiveness with the activity denoted by the verb that constitutes the necessary homogeneity of the event. Therefore cognate objects, though delimited (Section 4.3), are compatible with the *for an hour* diagnostic. (Macfarland (1995 : 155))

ここで言及されている Halliday は，range と呼ばれる参与者 (participant) として機能するものの一つとして同族目的語を挙げている。Range は *He climbed the mountain.* / *He*

played tennis./He ran the race. のような文における動詞の後の名詞句の役割を表す。Halliday は，同族目的語は，節において表される過程（process）と同じ時間的広がりをもち（co-extensive），単にその過程の名詞形にすぎないと述べている。

2 注1参照。

3 非完結的な状況を表す文が for を伴う時の副詞的表現と共起していて，境界あるいは終点を伴う解釈をもつ場合というのは，存在しないわけではない。Pustejovsky（1992：49）の指摘によると，Mary walked for 30 minutes．という文は，境界のある過程（bounded process）を表すという。すなわち，境界のある活動のことである。仮に，Macfarland の主張がこれと同じことであるとしたら，問題になっている説明はその限りで正しいということになるであろう。けれども，同族目的語構文に for を伴う時の副詞的表現が付加された文が境界のある活動を表すことを根拠に，同族目的語構文は完結的な状況を表すと主張することはできない。というのは，Pustejovsky の指摘は活動全般に当てはまるからである。

ついでながら，既に（3）として提示済みであるが，Massam があげている同族目的語構文の例の中に，for an hour のような副詞的表現が付くのは問題ないが，in an hour のような副詞的表現が付くとおかしくなるものがあるということを考慮しても，完結的な解釈のみで，非完結的な解釈を認めようとしない Macfarland の立場は，説得力に欠けるように思われる。

(3) a．? Casey laughed a hearty laugh in 20 seconds.
b．Casey laughed (a hearty laugh) for20seconds.

さらに，Olsen（1997：158）自身は同族目的語構文を活動とみなしていることも付け加えておく。

4 Olsen（1997：157）は，knit という不定の目的語省略を許す動詞に関しては，省略形の自動詞で活動を表す knit を基本形として，他動詞で達成を表す knit は自動詞に直接目的語が付加されて生じる形として扱っている。こうすれば，相の変化は [－telic] から [+telic] への方向になり自らの理論に合うことになる。これに習うと，不定の目的語省略を許す eat も省略形の自動詞の方が基本形で他動詞は目的語が付加されて作られるとみなすことになるものと思われる。このやり方は交替現象の取り扱いに関わる一つの問題を含んでいる。すなわち，どちらを基本形とするかという問題である。分析あるいは説明のための理論によって左右されるということはあるだろうが，不定の目的語省略の場合は，単純に自動詞を基本形に据えるわけにはいかない理由があると思われる。（詳しい議論については Onozuka（2000）を参照のこと。）ところで本文で扱われる（8）の場合に考えられる Olsen 流の分析法は，単独では現れない自動詞 eat を想定するので，不定の目的語省略の分析とは別物であることに注意してもらいたい。

5　(8b) は反復を表すので，活動の一種とみなされることもあるが，Olsen は達成の集合体とみなす。

6　非完結的な解釈の場合は，同族目的語は相の特性を変える働きはもたないので，目的語の機能は何なのかという古くからの問題もよみがえるが，ここではそれについては議論しないでおく。

参考文献

Halliday, M. A. K. (1967) Notes on transitivity and theme in English: Part I. *Journal of Linguistics* 3, 37-81.

Macfarland, T. (1995) *Cognate objects and the argument/adjunct distinction in English.* Ph. D. dissertation at Northwestern University.

Massam, D. (1990) Cognate objects as thematic objects. *Canadian Journal of Linguistics* 35-2, 161-190.

Olsen, M. B. (1997) *A semantic and pragmatic model of lexical and grammatical aspect.* New York: Garland Publishing, Inc.

Onozuka, H. (2000) Lexical aspect and object deletion. *Studies in Languages and Cultures* 52, 1-20. (Institute of Modern Languages and Cultures Bulletin, Tsukuba University.)

Pustejovsky (1992) The syntax of event structure. In Levin, B. and S. Pinker (eds.), *Lexical and conceptual semantics.* Cambridge, MA: Blackwell.

Tenny, C. L. (1994) *Aspectual roles and the syntax-semantics interface.* Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.